

アジアの野生動物観を考える

押田龍夫

—台湾の先住民族ブノン族の伝承から

野生動物は、世界中の国・民族の伝説・逸話・寓話の中に登場し、さまざまな役割を持つことが知られている。身近な例では、日本の昔話の中にアカギツネ、ニホンタヌキ、ニホンアナグマ（「ムジナ」と呼ばれる）がしばしば登場するが、人を化かす妖怪の類として扱われており、どちらかといえば気をつけなければならぬ、やや危ない相手としてのイメージが強い。ニホンカワウソ、ホオジロムササビもときとして人に危害を加えることがある妖怪と見なされており、専門家ではない私にはこれらの詳細はわからないが、昔の日本人はなぜか野生動物たちを妖怪視する傾向があったようである。一方、北海道のアイヌ民族では、さまざまな野生動物を妖怪ではなく、「神（カムイ）」にとらえた豊かな文化が醸成された。たとえば、ヒグマは山の神であり、「キムンカムイ」と呼ばれ、ヒグマの姿を借りて地上に降りた神を天上へと送り返すために熊の霊送り（イヨマンテ）の儀式が行われていた。エゾモモンガは子守りの神

「アツカムイ」であり、シマフクロウは村の守り神「コタンコロカムイ」、タンチョウは湿原の神「サルルンカムイ」、そしてシヤチは海神の「レブンカムイ」である。しかしながら、アイヌ民族のカムイは、絶対的に偉大な支配神のような存在ではなく、人の身近になんらかの役割を持つて現れ、人が利用することも可能な対象として認識されている。カムイはときにまちがいを犯し、人に対して被害を与えることもある。まさに自然そのものを率直に表現したような存在であると考えてよいかもしれない。

さて、日本にとどまらず広くアジアに目を向けたときに、野生動物に対するとらえ方は、「妖怪」と「神」だけであろうか？ 答えはもちろん否である。私は野生動物を研究するためアジアのさまざまな国・地域へ出かけているが、そこでときどき野生動物に関する伝承を見聞きすることがある。とくにアイヌ民族のように、野生動物を大切な資源として十分に利用しな

がら生活を営んでいた（現在も継続されているかもしれないが、狩猟などの規制が厳格化しているケースが多く、ここではあえて過去形で記すことにしたい）アジアの先住民からは、興味深い野生動物観を知ることができる。

ここでは、台湾の先住民の中で「ブノン族」に伝承されている野生動物の伝説をいくつか紹介し、その野生動物観について考えてみたい。台湾には、漢民族が中国大陸から移住する前から一六族の先住民（アミ族、サイシャット族、タイヤル族、タオ族、ツォウ族、ブノン族、バイワン族、ブユマ族、ルカイ族、サオ族、クバラン族、タロコ族、サキザヤ族、セデック族、カナカナブ族、サアロア族）が暮らしていた。全部族を合わせた人口は約五十五万人ほどであり、台湾の全人口の約二パーセントである。多くの部族が山地に暮らしており、険しい台湾の山地の自然と一体となった豊かな狩猟採集文化を部族ごとに持っている（押田 二〇三）。

私は一九九七年七月に台湾中部の東埔のブノン族（ブノン族の人口は約五・五万人）の村を訪れ、かつてはさかんに行われていた狩猟についてインタビュをしたことがある。いろいろな質問にお答えいただいたのは、八〇歳を過ぎながらも農業を続けておられる大柄の男性で、かつては旧日本軍の占領下で軍のために働いていたとのこと、日本語が非常に流暢で、旧日本軍主催の相撲大会でみごと優勝し、商品の米俵を獲得したことがあるというエピソードをまず話してくれた。この方のお話で

は、ブノン族のおもな狩猟対象はサンバー（シカの仲間）、ニホンジカ、タイワンカモシカ、キョン、イノシシなどの大型獣であり、かつては罾や銃でこれらを獲っていたそうである（押田 二〇〇）。台湾に生息する野生動物がかつてのブノン族の生活において大切な資源であったことがうかがえるお話であった。そして、ブノン族には、野生動物に関するさまざまな伝承が残されているので（田 一九九五、いくつかの例をここで紹介し、ブノン族の野生動物観について考えてみたい）。

まず台湾最大の食肉類であるタイワンクロクマについては、明確な「教訓化」へとつながる伝承がある。あるとき、猟師が山で酒に酔って眠り込んでしまったのであるが、この猟師を見つけたタイワンクロクマの母親は猟師を背負って巣へと持ち帰り、子グマに人の食べ方を教えるのである。猟師は途中から目を覚まし、寝たふりをしながら母グマの教育を耳にする。母グマは子グマに「お尻の肉を食べると将来子どもを産むとき、赤ちゃんに悪い影響がある。上腕の肉を食べると冷え症になる。足の裏の肉を食べると大腿やふくらはぎなどに力が入らなくなり歩けなくなる。腰の肉を食べると積雪の中を歩くことができなくなる。頭の肉を食べると馬鹿になる」と説明し、食べる場所と健康との関連を教えるのである。猟師は隙を見てクマの巣から逃げ出し、村に戻ってからクマから聞いた獲物を食べる部位と健康との関係を仲間たちに伝えるのである。以来、動物の肉の食べ方について、ブノン族ではクマからの伝承が伝わった

という説がある（これが実際に慣習化しているかについては定かではない）。医学的な根拠があるわけではないが、教訓の典故が母グマの教育口伝であるという興味深いお話であるかもしれない。

台湾の野生動物で唯一の霊長類であるタイワンザルについては、人が変身してサルになってしまったという伝承がある。鋤を持って働いていた村人たちがタロイモを煮て食べようとするのであるが、煮えるのが待ち切れず、みなで生煮えをつかんで食べてしまうのである。熱い熱いと騒ぎながら頬張り続けるうちに姿がサルに変貌し、また、生煮えの芋は渋味があり喉に絡みつくため、声も「キャッ！ キャッ！」に変わってしまう。そして、手に持っていた鋤は尻尾となってお尻に着いてしまうのである。生煮えのものを卑しく食べるとどのような結末になるのかに関する、こちらも教訓めいたお話である。

たんに変化してしまうという伝承としては、台湾の固有種であるタイワンカモシカの逸話がある。人が大きな岩を崖の上から転がしたところ、転がった岩がタイワンカモシカに変わって動き出すのである。このお話にはとくに教訓めいたものは感じられないが、カモシカは険しい岩崖を自在に移動することができ、哺乳類であり、「崖」と「岩」と「カモシカ」がセットとして扱われている部分は、まさにブノン族の人たちのカモシカ観察の賜物であろうと考えられるかもしれない。

最後に、悪者の代名詞のような扱いとなっているミミセンザンコウのお話を紹介したい。この伝承には、ミミセンザンコウとベンガルヤマネコが登場する。二匹は草原を見渡せる高い場所に立ち、こんな会話を始めるのである。

センザンコウ「もし草原に火がついて火事になっても私なら炎の中で耐えて生きることができるが、あなたにはできないでし

ようね」

ヤマネコ「そんなことをいうのなら、ほんとうにできるかどうかまづはやって見せてください」

センザンコウ「わかりました。もし私が成功したらあなたもやってくださいね」

ヤマネコ「もちろんです。あなたにできるなら私にもできますから！」

センザンコウは草原に火を放ち、その中に身を投じるが、火の中ではなく、鋭い爪で穴を掘り、地中に潜んで炎をやりすごすのである。火が消えた後に、なにともなかったような顔をして戻ってきたセンザンコウは、ヤマネコに「次はあなたの番ですよ。やってみてください」と話しかける。ヤマネコはセンザンコウがだいじょうぶなら自分もだいじょうぶだろうとたかをくくり、別の草原に火を放ち、火中へ入るのであるが、もちろん生きていられるはずはなく、あつけなく焼け死んでしまう。ヤマネコをだまして焼き殺したセンザンコウが悦に入るといった結末がこの伝説であり、ハッピーエンドとは程遠い。そして、この伝説にはいくつかのバリエーションがあり、たとえばセンザンコウやヤマネコだけではなく、カラスもこのやりとりに加わるというバージョンもあるが、ヤマネコ同様にセンザンコウにだまされ焼け死んでしまうのである。台湾にはヤマメスなどのカラスの仲間が息をするが、具体的にどの種類であるのかはわからない。しかしながら、羽毛が黒色になってしま

ったのは、このときの炎で焼かれたためであると伝承では説明されている。このセンザンコウを悪役としたお話からも教訓めいたメッセージを受け取ることができる。「意地を張らずに余計なことをしなければ安全に暮らすことができる」「ものごとには裏があるかもしれないので慎重になるように」といったことを大がかりな舞台設定とストーリーで訴えているように私は感じられてならない。

ブノン族に伝わる野生動物に関連する伝説は、日本のものと

比べるとより人臭い印象がある。キツネやタヌキなどの野生動物が人に化けるのではなく、人や岩が野生動物へと姿形を変えており、変化のベクトルが日本の場合とは真逆になっている点に興味深い。アイヌ文化の神が野生動物へ姿を変えたというパターンに近いのかもしれないが、人が変化の起点となる部分でこれとも異なっている。そして、野生動物を主人公とした教訓が含まれており、イソップ寓話のような一面も醸し出されている。たんなるお説教を子どもにしても忘れ去られておしまいであるが、おとぎばなしとして口伝すればいつまでも語り継がれる可能性が高まり、部族の維持・繁栄に大切な役目を果たすかもしれない。固有の言語を話すが、文字を持たない（かつてはブノン文字が存在したという伝承もあるが）ブノン族が教訓を伝達するための知恵であったのかもしれない。

私は文化人類学の専門家ではないが、今回はブノン族の野生

動物伝説について少しだけ紹介させていただいた。アジアにはさまざまな先住民族が暮らしており、多くの野生動物文化が育まれている。今後も野生動物の研究の傍ら、これらを発掘し、ご紹介することができればと考えている。SDGsが世界的に叫ばれているなか、古き先住民族の文化にその解決の糸口が隠されているのでは？と想像をたくましくしている次第である。

〔引用文献〕

田 哲益。一九九五。台湾布農族風俗図誌。常民文化出版、台北。

押田龍夫。二〇〇〇。台湾の先住民族とムササビ。リスとムササビ八・五―七。

押田龍夫。二〇二三。台湾動物記——知られざる哺乳類の世界。東京大学出版会、東京。

（おしだ・たつお 哺乳類学）